

北海道東方沖地震の起きた夜、不安な思いでテレビを見つめ続けた人たちがいる。日本地図が映し出され、大地震が起きたとほわほわの音が、それ以外のことはわからない。アンソウサンが口をパクパクさせているのが見えるだけだ。

私たちの社会は、だれもが耳が聞こえるという前提でつづられてきた。学校も駅もホームも役所も、それにテレビも。だから聴力が落ちると、たちまち社会から取り残されてしまう。孤独地獄に突き落とされ、身は危険にさらされる。

寿命がのびて、聴覚障害をもつ人の数は増え続けている。七十歳を超えると二人に一人が耳が遠くなるという。病気や薬の副作用などでも若くして聴聴になった人も加えると、六百万人ものぼると推定されている。

図書出版
ぶどう社
 東京都千代田区神田小川町3-5-4
 お茶の水SCハウス905
 FAX03(3295)5211

●朝日新聞論説委員室 大熊田紀子
福祉が変わる 医療が変わる

だが、文字にすればよくわかる。そこで欧米諸国では字幕付きのテレビ放送が普及している。選挙やニュースに字幕を入れることはとくに重要だ。米国ではテレビに字幕表示装置を組み込むことが法で義務づけられた。会議などの発言を次々と書き取ってスクリーンに映し出す「要約筆記」と呼ばれる方法もある。日本ではボランティアたちが全国要約筆記問題研究会をつくって技術をみがいているが、普及は遅れている。

第一は、補聴器と、その聞こえをよくする磁気誘導ループを対にして考えることだ。補聴器をすぐやめてしまつて人は多い。三倍以上離れると聞こえにくくなる上、雑音も拡大してしまつたのだ。ところが、よく合った補聴器をつけ、ループ装置を備えつけた部屋で聞けば、マイクを通じた音だけがきれいに聞こえる。装置の本体はアンプと電気コネクタなどで価格も安い。先進諸国では、学校や会議場、劇場、教会などが集まる場所に

55 「難聴化社会」対策を急ごう

ループを備えることが広まりつつある。日本では徳島県が進んでおり、重い難聴の人が演劇を楽しんだり、講習会で新しい技術を身につけていたり。城崎での大会では徳島の阿南市と藍住町の移動式ループが運ばれて会場にセツトされたので、補聴器をつけてた人や人工内耳を埋め込んだ人が活発に討議に参加できた。

小型のループを使えば、耳の遠い人も、家族と一緒に普通の音量でテレビを楽しめるし、電話も聞こえやすくなる。

第三は、「聞こえること」の保障は人権だといつ視点を、みんなが持つことだ。難聴は手足の障害のついでに見えず、当事者の発言の機会が乏しかつたので、悪気がなくてもついでに忘れられてきた。

「高齢化社会」は「難聴化社会」でもある。耳が不自由な人に配慮のなげ病院、老人向けバスで点検し、変えてゆきたい。

●その後
 95年10月 郵政省で「視聴覚障害者向け専門放送システムに関する調査研究会」が発足。テレビの字幕などについての検討が始まる。
 96年4月 郵政省の「高齢者・身体障害者の社会参加支援のための情報通信の在り方に関する調査研究会」が報告書。「情報発信、アクセスは新しい基本的人権である」と明言。

☆全日本難聴者・中途失聴者団体連合会
 東京都新宿区市ヶ谷台町一四MSビル
 ☎〇三二三二五五五〇〇
 〇三二三二五五五〇〇四六